

飯塚耕一郎

●北朝鮮拉致被害者・田口八重子さん長男
(いづか・こういちろう)

撮影 佐々木悦久

「母を知らない」

それが私の拉致問題

母親が北朝鮮に拉致された三十一年前、飯塚耕一郎氏はまだ一歳の赤ちゃんだった。

当時は誰もが突然の失踪としか考えていなかった。しかし、大韓航空機爆破事件をきっかけに、徐々に真相が明らかになっていった。

母・田口八重子さんは、実行犯の一人に日本語を教えさせられていたことが分かり、その事実を飯塚氏は二十一歳のときに知ることになる。

北朝鮮への憤りを抱いて北朝鮮による拉致被害者家族連絡会(家族会)での活動を始め、この三月には田口さんの北朝鮮での様子を聞くことのできる人物のうちの一人である、金賢姫元工作員との面会も果たした。

記憶のない人物を取り戻すという実感の乏しさに加えて、世界で最も困難な相手と闘わざるを得ない飯塚氏の拉致問題は、母を「田口八重子さん」と呼ばせ、「泣くことは私の感情とは違う」と言わせるほど、根深い。

それでも、自らの立場を「宿命」と捉え、自己の存在意義を自問しながら救出活動を続ける飯塚氏に聞く、「田口八重子さん」のこと、そして家族のこと。

「拉致」から四年の葛藤後
「死亡」と報じられて

「田口八重子、死亡」という報に私が接したのは、二〇〇二年九月十七日、二十五歳のときで、半年間のイギリス勤務の期間中でした。

その四年前、海外研修のためにパスポートを作ろうと戸籍謄本を取りに行つて自分が養子であることを知った際に、親父から「実の母は北朝鮮に拉致されたんだよ」と聞きました。それ以来、八重子さんに関する情報をインターネットのニュースでチェックするようにしていました。そして、その日の朝、速報のような扱いで、わずか一行の「田口八重子、死亡」という文字を目にしたわけです。概略も骨子も分からないし、情報の入手手段もない。それで、イギリスの小さな公園のベンチから親父に国際電話をかけた。九月の、さわやかに晴れた日でした。

ところが、親父も、後で外務省から連絡が来るらしいけれど、今の段階ではさっぱり分からないと言うし、死亡が事実であったとしても、遺骨があるわけでも、証拠があるわけでもない。そうなる



飯塚 耕一郎 いづか・こういちろう

北朝鮮拉致被害者・田口八重子さん長男。北朝鮮による拉致被害者家族連絡会事務局次長。1977年(昭和52)埼玉県生まれ。1歳で母・田口八重子さんが北朝鮮に拉致され(そのことが判明するのは、1987年の大韓航空機爆破事件の容疑で北朝鮮の金賢姫工作員が逮捕され、取り調べを受けた後のこと)、21歳のときにその事実を養父である繁雄氏から知らされる。25歳のときにイギリスで「田口八重子、死亡」の報に接したが、金元工作員などの証言から死亡は虚報であると分かる。2004年に自ら田口八重子の長男であることを表明し、以後、北朝鮮による拉致被害者家族連絡会(家族会)で活動し続ける。今年3月には5年間の念願だった金元工作員との面会が実現。「母が拉致された時 僕はまだ一歳だった」(双葉社)の原作・監修がある。

その確認に北朝鮮に行くことになるかもしれないから、すぐに帰国して準備をしなければ、と親父に言ったところ、まだ詳細が分からないから、しばらく待ってくれという話になりました。

そして、親父が「ちょっと待って」と

言つて、受話器の向こうから聞こえる泣き声の母ちゃんに声を聞かせてあげてくれと言ふから、「泣くだけだからいいよ」と断つたんですが、どうしても言うので仕方なく母ちゃんと話しました。今でも鮮明に覚えています。母ちゃんは「ご

めんね」と言つて泣き出したまま会話にはなりませんでした。

考えてみると、そのときから遡ること四年前に、実の母親がいて、北朝鮮に拉致されているという情報を初めて聞いて、その次に入ってきた情報が「死亡」

だったわけです。母親の顔を知らない、ただでさえ母というものに対する実感の乏しい人間が、四年間さまざまな葛藤を繰り返していたところに、「死んでいる」というわずか一行の情報。それをまともな受け取ることができるはずはありません。

人の母親を勝手に連れて行って、勝手に殺してしまった北朝鮮に対しての理不尽さと、僕が事実を知るまでの二十一年間、ずっと気遣って心優しく育ててくれた母ちゃんに、何も悪いことはしていないのに「ごめんね」と言わせてしまうことの悔しさ。切ないし、悔しいし、腹立たしいし、そういう負の感情がうわーっと押し寄せてきて、人生の中でこれほど泣くことはもうないんじゃないかと思うくらい泣いて……。

未消化のままの 金賢姫さんとの面会

イギリスで感じた気持ちは何ともしたかと思つて、二〇〇四年二月には、「田口八重子の息子です」と名乗って「家族会」の活動に参加することを決めました。そして、金賢姫さん宛てに、お会いしたいという手紙も書いて、外務省を通じて

渡してもらおうように託しました。それが五年後の今年三月十一日に実現したわけです。

韓国での金賢姫さんとの一時間半の面会で聞けたことは、彼女が以前に出版している『忘れられない女―李恩恵先生との二十カ月』（池田菊敏訳・文藝春秋刊）の中で書いているようなことがほとんどだったのですが、直接本人から聞けたことには感謝しています。

しかし、金賢姫さんにお会いして話をしたことが自分には心情的にどうだったのか、まだ整理できていないというのが正直なところです。もちろん、会えて話ができただけは素直にうれしかったし、金賢姫さんも喜んでくれたし、ずっと手を握って、最初の四十分間くらいは私が知りたいであろう八重子さんのことを語り続けてくれたのですが、金賢姫さんに会えたうれしさが、そのまま八重子さんに対する感情に影響を与えたということはありません。ようやく会えた、という達成感みたいなもののほうが強いように思います。

彼女も私たち「家族会」の人たちも、ある意味では、北朝鮮の被害者です。それぞれに歯齧みをする思いがあつて、そのなかで、「こういうことに関して一緒

にやっつけていきましょう」という気持ちを強くした、という言い方が正しいような気がします。

二〇〇四年に金賢姫さん宛てに書いた手紙は、届いていなかったことが彼女との面会で分かりました。結局それは、外務省に放置されたままになっていたのです。それを金賢姫さんと面会した翌日、帰国して外務省へ行き挨拶をした後、内閣府へ向かう車の中で拉問題対策本部の室長から渡されました。そのとき謝罪の言葉などは一切ありません。面会の数日前には、「手紙は全精力を上げて外務省にも探してもらっています」という室長の話でしたし、見つかって金賢姫さんに「渡せばいいじゃないよ」とも言っていたのです。でも面会までには見つからず、『妹よ』（飯塚繁雄著／日本テレビ刊）や『母が拉致された時 僕はまだ一歳だった』（飯塚耕一郎原作・監修／本そういち作画・構成／双葉社刊）に引用されている手紙の全文を、金賢姫さんの前で読むことで伝えたのです。

その手紙にも書いていた「二〇〇二年九月に母の死亡報道を知った」そのときの気持ちはいまだに自分の中で整理できていないのですが、きっと自分の中に、二十五年ものあいだ触れることができな

かった母親に対する愛情がない、と知ったからだと思つています」という感覚は、今もそれほど変わっていません。母親だと思つたことがない人に対する感情が湧いてこないのです。ですから、「お母さんが北朝鮮に連れ去られたから悔しい」と感情的に言えない。もしかしたら、それは永久に整理がつかないのかもしれないという思いもあります。

激昂したり泣いたり 私のすることではない

帰国して、体の疲れも、精神的な疲れも取れたときに私が思つたのは、面会も含めて、「家族会」で活動したり、講演をやったり、メディアの取材に応えたりする、その私の存在意義はどこにあるのだろうかということでした。もちろん拉致されている人たちを救うためというのにはあるのですが、そのための方法論や手段として私という存在にはどういう意味や意義があるのかと。考え抜いたからといって分かるものとは思えませんが、あれ以来、ふとしたときに思い起こしては考え続けています。

以前、よく言われました、「あなたのような境遇の人は、世界でもあなたしか



金賢姫元工作員と抱き合う飯塚氏（写真提供・産経新聞社）

いない」と。そのとおりでと思います。そういう特殊な境遇にある私が発する言葉は、どういう意味を持つのだろうかと思つてきました。それもいまだに分らないのです。金賢姫さんの、八重子さんに対する思いも、私に対する思いも、よく伝わってきて純粹にうれしいのですが、自分が与えられたものに対して次にどうしなければならぬのか、そのベクトルや手段が分からない状況です。

それは、一緒に暮らしていたきょうだ

いや子どもが連れ去られた方々と境遇が違って、私の場合は、母親であるけれど顔も知らない実像が浮かばないからだと思います。親父の「妹である八重子」に対する感覚とも違うんです。親父の場合は、家族を救いたい、妹を救いたい、ということなのですが、私の場合は、母親のことを「分からない」ということが前提としてあるわけで、当然、親父と並んで記者会見しても言葉が違うんです。もしかしたら、私が結婚して家族を持っていたら、また違うのかもしれませんが、それは別々の次元かもしれない。それは分かりません。妻がいて、子どもがいて、百パーセント愛情を注いでいたとしても、「あなたのお母さんは、北朝鮮です」とあなたのことを思っていたのよ」と言われることへの反応は、「ああ、そうなんだ」かもしれない。でも、そういう感覚は、誰にでもあるのかもしれないと思つたりするんです。

私がいまだに金賢姫さんに会つたことが整理できないのも、他の被害者家族の方々との境遇の違いによるものでしょう。私の境遇、そこに尽きます。「金賢姫さんに会って母親のことを知ることができると本当に良かったです」と言うこともできるのですが、それだけではないもつと

強い何かがあるために、そこだけを喜ぶことができないんでしょね。もっと強いものというのが、言い換えると、拉致問題における私の存在意義ということになると思うんですけど。

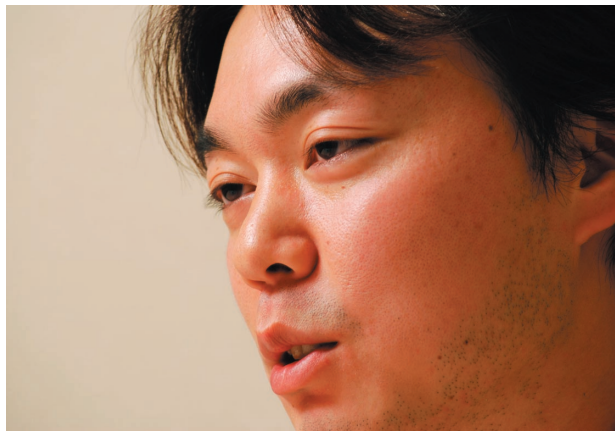
「いいんだよ、おまえはおまえで言っていけば」というふうに思っている人もいるかもしれないけれど、そこを曖昧にしようとして、みなさんの前で語ることも熱がなくなってしまう気がするんです。「お母さんのことが聞けて良かったですね」という論調、そこだけ取り上げられることは、私にとっては苦痛なのです。

「お母さん」という言い方も違う気がして「八重子さん」と言いますし、そこは私としてはブレてはいけないような気がしています。私が私の感覚として思っている言葉で伝えなければと思っています。単純な「悲哀の物語」や「美談」として扱われ、そこに私が乗っかっていって、私自身が崩壊してしまつては意味がないし、そうしないと、この問題が全面解決する前に自分が疲れてしまつてしまうんですから、拉致問題に関する集会などで、私が激昂したり泣いたりすることは、ほぼありません。それは私にとっては違うと思うから。そうすると、なおさら自分の存在意義というものを考えざるを得

なくなるのです。ほかの家族の方々は泣いていても、私は淡々としゃべっている。私は「分かること」から始めなければならぬんです。でも、それが私にとっての実態であるし、私にとっての拉致問題の第一歩なのです。

特殊な存在であることを引き受けていく

私が活動を続ける原点は、親父に妹を会わせたいということと、母親を見たい



私しかいないんですが、「ああ、そうなのか。一人だけ色が違っていて当然なのか」と、そのとき思いました。

帰国後、あの面会を終えた自分がこれまで語ったことは、あまりにも「いい子」ぶっているだけのような気がし始めました。特に政府に対して。現実問題として、金賢姫さんに会うだけでも五年もかかっているわけです、会いたいと思いを伝えてから。私が活動に加わってからのこの五年間、二〇〇四年五月二十二日に五人の方が帰国されたこと以外、何も変わっていません。政府は「努力する」と言いながら何も進まない。

昨年の十一月には拉致された市川修一さんのお母さん・トミさんが九十一歳で亡くなっています。われわれに与えられた時間は無制限ではないのです。金賢姫さんにお会いできて私の心が救われた部分は確かにあるけれど、遅々として進まない現実もある。これを打破していかないと、家族が家族に会えない状況が、今後ますます増えていくかもしれない。そうなってはいけないというのが、これらの活動でもっと重視していきたいところ。昨年秋のアメリカの「テロ支援国指定解除」に対する日本のリアクションもそうですし、つい最近の「ミサイ

ル」に対しても、本当に日本政府はやる気があるのかということを含括的に問いただしていきたくと思っています。

今後の対北朝鮮に関して、金賢姫さんが、「自尊心を活かして、閉ざされた心を動かすような」方法を、とおっしゃったことは、その言葉自体は間違っていないと思うのですが、一方的に向こうの自尊心を持ち上げるようなやり方ではないだろうと思います。北朝鮮の周辺状況をがっちり固めたうえで、一カ所だけ捌け口をつくっておくかたちで交渉していくのであれば、現実的なものとなっていくと思います。捌け口をつくるときに相手のプライドを尊重するようなやり方がいいと考えます。九〇年代後半には日本から無償の米をもらっていたり、つい数年前までも重油供給や軽水炉建設資金を核施設解体の条件にちらつかせるなどしていた。ところが今や、核再開発を進めている。宥和的な交渉を進めても、まったく意味がないことは、現実が明らかになっているわけですから。

拉致問題が突き付ける日本国民としての関わり方

拉致問題について国民の関心がまだ薄

ということ、そして宿命みたいなことを思うからです。まず、親父に妹を会わせるという気持ちがあれば、活動するモチベーションも保てません。今は、自分の仕事とこの活動ですが、家族を持って、仕事をして、活動をして、となると、続けていけるのかまったく分かりません。面会の前の一カ月間は、本当に気がおかしくなるような毎日でした。連日の取材、それも仕事を終えた夜十時過ぎ、土日も休める時間はない……。どこかで自分の活動の意味付けや理由付けをしておかないと、とても続けられません。だから、まず親父に、という気持ちを持ち続けているんです。そうしたほうが、私はこの活動に対する自分の感情の位置付けがしやすいのです。自分の母親を救出することよりも、それがいけばいいから。

宿命というのは、世界で一人しかいない特殊な境遇であることに抗うことにはできないという現実です。受け入れるしかないことです。「家族会」の会議の席である方が、「これまでは親の世代ががんばってきた。ここ五、六年はきょうだいの年代、そして今は息子の代へと徐々に変わってきている」とおっしゃいました。息子の代というのは「家族会」の中には

でも、それは私も同じです。そういう「ミサイル」が飛ぶことに関して他人事の感覚を持つのも分かるし、「ミサイル」を「拉致問題」に置き換えても同じだと思っんです。そういう反応が今の日本人の一般的な感覚としては正しいのだと思います。その意味で「分かります」と言うのですが、何かのタイミングがあつて初めて、この問題の見方や捉え方が変わるんです。

「北朝鮮に対して経済制裁を行え」などというタカ派的な言い方が飛び交うのは、家族が純粹に家族に会いたい、だけど政府は明確なビジョンを持ってこの問題に取り組もうとしていない、そのもどかしさや悔しさからだということです。家族に会うために、北朝鮮との交渉を有利にするために、経済制裁をしてほしいと言っているのだということを理解してもらいたい。

そして、この面会はどういう意味があるのだろうか、なぜ抱き合っているのだ

ろう、という疑問をちよつとでもいいから持つてもらいたい。何もしないでこのまま十年過ぎてしまうよりも、経済制裁によって今からちよつとの間は拉致された方々には我慢してもらおうことになっても、その後に帰国できるかもしれないほうを選択するのが現実的だろうと思うからです。

横田早紀江さんがよくおっしゃるんですが、「川でおぼれている子どもがいて、それを見かけたら、あなたは助けようとするでしょう？ それと同じ感覚でいてください」と。川でおぼれている子どもを見た、ということが、拉致問題を知ったということ。それを知ってしまったら、助けたいと思うのが人間の本質なんじゃないですか、と言っただけじゃありません。思うのです。その気持ちこそが、拉致問題が日本人に突き付けている本質的なことだと思います。

お互いを親身に思う そんな家族がたくさんいる

私には、母親として捉えることができず、育ててくれた母ちゃん、栄子さんですね。それから、友達のお母さんたち

もなし」と思いながら聞いています。そして、八重子さん本人が帰ってきたときにも、八重子さん自身の感性で私を見てくれればいいと思っています。

私には、家族というのは、実家にいる人たちだけではなくて、二十年以上の付き合いのある親友もその家族も私の家族だという感覚があります。私は、正月は実家に帰らずに親友の家に帰るんです。そこに他の友達もやってきて、そこで正月をするんですよ。「おまえ、ここに来る前に一度実家に帰れよ」と、よく言われるんですが、「いいんじゃない？ どこも一緒でしょ」みたいなことを言っています。

だから、私の近しい人はみんな私の家族だと思っているんです。別々に育った実の姉も、私の家族です。お互いのお互いのことを親身に考えられるのが家族かなという気がしますし、そういう人がたくさんいたほうがいいじゃないですか。その意味では、金賢姫さんにも家族という感覚が多少あります。

割り切れなさこそ 正しい気持ち

いま、八重子さんと私との間には、「血

ち。息子にも、息子の友達である私にも、子どものころから分け隔てなく接してくれる人たちです。戸籍謄本に、「養子」「養父」「養母」という文字を見たとき、なぜ高校を卒業したときや二十歳になったときに言わなかったのか、放置してきた理由は何だったのか、私には分からない親としての考えを知りたくて、戸籍謄本を持って友達の家に向かい、そこで友達のお母さんと話し込んだ。そういう恵まれない環境が私にはあります。そして、三人目が今回面会した金賢姫さんです。彼女は八重子さんも知っている人だから、私の気持ちも分かっている人だから、「私が韓国のお母さんになってあげます」と言ってくれただけだと思えます。繁雄さんという親父と、栄子さんというお母ちゃんは、私にとってはまったく普通の親です。もちろん、これだけの問題に接している家族ですから、普通の私たちとは違うあまりにも大きすぎるフィールドも持っていますが、食卓でテレビを見ながらジャイアンツの話をしたり、まったく普通の親と子ですね。ただ、そのジャイアンツの話の合間に突然、「そういえば、この前、拉致問題に関してこんなことがあってね」という会話が差し込まれることが、ほかの家庭とは違っていると

のつながり」ということ以外に明確なものはないんです。写真も見てみますし、常に手帳に挟んで持ち歩いてはいるけれど、生の感覚がないわけです。ふとしたときに気持ちが高ぶって「ああ、お母さんなんだなあ」と思うこともあるけれど、いつもそう思うわけではない。だから、どっちつかずのような感じで、割り切りがむずかしいんです。

でも、その割り切れなさの部分が、私の八重子さんに対する正しい気持ちなんだと思っていますし、「割り切れないんです」と伝えることが重要なことだとも思っています。

ずいぶん前に、親しい人から「お母さんが戻ってこなかったとして、それあなたが何か変わるの？」と言われたことがあったんです。「救う」とかかっていうことは、あなたにとって重荷になったり、足かせにならないの？」「ときどき、どうでもいいやとか思ったりしないの？」という言い方もされました。

その言葉に、正直はつとしました。確かに、本来ならば助けることが必然と思うべきなのに、心のどこかでこの問題の責任を重く捉える責任感という気持ちになつてきたのかもしれない。

私はまず自分の母親を知ることから始



ころですけれど。親父や母ちゃんが変なことを言えば「おかしいよ」と私は言うし、毎年、旅行のプレゼントもします。そのへんは、まったく普通の家庭と同じです。

ですから、親父が「八重子が帰ってきたら、立派に育った耕一郎を渡してあげたい」といったようなことを対外的に言っても、私はその言葉を、普通の家庭ではどこでも交わされる「うちの息子はこんなことができましてね」のような感覚で聞いているだけです。親父の妹に対する感情を聞いて、それで私が何かを感じることもありません。「おれ、立派で

めたいのです。そうしないと、活動の根幹がなんだか分からなくなってしまうから。思ってもいないことを無理やり自分に思わせながらやっていくのは、今よりもっときついだらうと想像できます。ですから、ほかの家族の方たちと違って、モチベーションの持ち方がむずかしいんです。でも、こういう言葉は本当は胸の内にとどめておくべきことなのでしょうね。

「家族会」の方々が集会で涙を流しながら訴えます。拉致された兄や妹や子どもを救うのだと。でも、私が同じように涙を流したら、それは嘘だという気がしません。自分の記憶にきちんと母親の姿があつて、それを思い描きながら「助けてください」と言えるのなら涙を流すことができるでしょうが、私の場合はそうではないので、逆に涙を流すのは不自然になつてしまふ。

つまり、「泣かない」ということが私にとっての拉致問題の実態であるし、実の母を「八重子さん」という言い方をしてしまうのも実態の一つなのです。山口八重子さんという母を知らないし、しかも、知ることができない今の状況が、より重い現実問題となつていっているのです。

